

夢溪筆談

徳川家康

続 蕭風城の巻・戦争と平和の巻



山岡莊八 講談社

徳川家康 第十七卷 孤城落月の

卷 立命往生の巻 昭和四十二年四

月二十日第一刷発行 著者 山岡

莊八 発行者 野間省一 印刷所

凸版印刷株式会社 製本所 大製

株式会社 発行所 株式会社講談

社 東京都文京区音羽二ノ一二ノ

二一 振替 東京三九三〇 電話

東京(九四二)一一一一(大代表)

©山岡莊八 一九六七

定価 六百二十円

徳川家康

17

孤城落月の巻
立命往生の巻

目次

孤城落月の巻

夏の陣開戦

七

道明寺出陣

三二

若江の長門

四〇

真田軍記

六〇

家康の旗

七七

五月七日

八九

敗将の兜

一〇九

孤忠の刺刀

一二五

杜鵑落月

一三七

童心俗心

一五二

大和の悲愁

一七三

伊達の信仰

一八四

次なる波線

二〇六

激突

二一八

王道門

二三四

そば杖

二五〇

立命往生の巻

朝顔夕顔

二六三

雷神乱舞

二八五

天命と運命

三〇三

上総の雨

三二七

浅草川

三四九

鷹野の虎

三六八

付 録 (参考地図)

装幀 稲垣行一郎
挿画 木下二介
箱裂地 麻地草花人家文様茶屋染
提供 山口 勉
表紙金版 徳川家康直筆署名

徳川家康

17

孤城落月の巻
立命往生の巻

孤城落月の巻

夏の陣開戦

一

大坂夏の陣は、大野治房の兵二千あまりが、暗り峠を越えて郡山に放火したときから開始されたとされている。

その日時は四月二十六日と記録されているが、その時にはすでに郡山の東北の村落はすっかり焼きはらわれて、捨ておくど奈良一帯も焦土になりかねない危機を迎えていた。

そこで五条城の城主であり幕府の代官でもあった松倉豊後守重政は、奥田忠次とともにそれを迎え討つため、国分

越えに引きあげ、大和はすでに戦場になってしまっていた。

大野治房をこうしてはげしく強硬な主戦論者に仕立てあげた理由は幾つかある。

兄の治長の態度が煮えきらなかったのもその理由の一つだが、直接の動機は、彼が次第に信頼していった甲州牢人の小幡景憲が、軍師どころか実は、所司代板倉勝重と示し合わせてまぎれ込んだ関東の間諜であったとわかったことであつた。

治房は景憲を信じきって、軍評定の席では、つねに景憲の意見を支持して真田幸村に対抗していた。

そして、いよいよ景憲に心酔し、景憲のためにわが屋敷内へ、わざわざ彼の居室まで新築してやっていたのである。

その小幡景憲が、堺の様子を探りにゆくと称して城を出たまま失踪してしまったのだから、彼の立場はまことにおかしなものになった。

「——手のつけられぬお人好し……」

そうした陰口を封じ去るには、彼は、手のつけられぬ強硬な主戦論者にならなければならなかったのだ……

彼の景憲に裏切られた心の傷は大きかった。

（——人は信じられぬ！）

まだ若いせいもある。彼の人間不信は一躍して、極端にニヒルな自力信者に一変した。

家康や秀忠ばかりか、実兄の治長や、母の大蔵の局までも信じようとはしなくなった。むろん秀頼も信じていない。ただ秀頼を煽り、秀頼を駆って戦うのでなければ、戦い得ないゆえそれを戴いているのに過ぎない。

そうした彼が、兄や母の心の底に、秀頼を郡山に移したい……という心の動きが何程かにせよあると知れば、まづまっ先にそこを焼き払って、その夢を断とうとするのは当然だった。

こうして彼の繰り出させた軍勢の、郡山と奈良方面の攪乱が発火点となり、続いて彼の狙ったのは、和歌山勢の挟み討ちであった。

和歌山の浅野長晟は若くして亡くなった先代幸長の弟である。豊家とは切っても切れないその浅野家の当主が、兄治長や秀頼の招請には一顧も与えず、その妹を、名古屋の義直に嫁がせて、家康に媚びてゆくというのは、許せない不潔さに見えた。

「——今に見よ。思い知らせてやるぞ」

そこで彼が、直接長晟を説くことをやめ、領地内の郷士や、吉野、熊野などの地侍を煽って各所に蜂起させる手段をとった。

そしてすでに彼等は無気味な、ろしをあげだしている。これに呼応して、治房はその弟道大とともに、堺を焼いて岸和田へ進出し、豊家から家康に寝返った小出家の当主吉英を踏みつぶして、この方面を固めておこうとしたのである。

そうした情勢の中で、板倉勝重から浅野勢に急遽進発するよう催促があったのは、四月二十八日で、その日、堺の街は紅蓮の炎に包まれて燃えつつあった。

二

四月二十八日は、炎上している堺で、関東方の水軍、向井忠勝、九鬼守隆等が、大野治長、真木島玄蕃などとはげしく戦っていただけではなく、京都においても危機一髪の大事件が持ちあがり、市民の動揺は一方ならぬものがあった。

「——大坂方から京都を焼き払うために、多くの密偵がまぎれ込んでいます」

その噂におびえきっている混乱の中で、板倉勝重が、

「——安堵せよ。放火の首謀者以下、そっくり所司代の手で召し捕ったぞ」

そうした布告がなされたばかりでなく、二十八日と決まっていた家康の出陣が、五月三日に延期されたのだ……

放火の首謀者以下は、すぐさま市民の前に晒され、あらゆる人々に罵られながら刑場へ引き立てられた。

首謀者は言うまでもなく、大野治房と呼応して京へ潜入して来た吉田家の家老木村宗喜で、宗喜の配下として捕えられた者は三十余人であった。

そしてこの時すでに、大和の郡山では、郡山城の守将筒井正次は城を捨てて走り、大坂勢は奈良へ殺到していたのだから、この日の武運が若しも豊家側に幸いしてあったら、炎上しているのは堺だけではなくて、奈良、京都という日本の古都は二つながら灰燼に帰していたに違いない。全くハラハラするような国土受難の危機をはらんだ日であった。

むろんこうした危機を察すればこそ板倉勝重の浅野勢進発の催促だったのだが……

水野勝成を主将とした大和口一番手の軍勢はこれも奈良方面に急行していたが、彼等の到着する寸前に、奈良を焼き払われる危険がある。

そうなれば浅野勢を和歌山から進発させて堺に向わせ、この方面に大野治房の眼をそらさせて、彼等の前に立ちふさがらせるより他にない……と、勝重は考えたのに違いない。

「——京と奈良はどのような事があろうと焼かせてはなら

んぞ」

それは家康の厳命であった。

この厳命が無かったら、「義——」によるつもりの大坂勢は、豊家と古都の比重など考えてゆく余裕のない暴兵として、末代まで悪名を残すことになったであろう。

浅野長晟は、そうした危機一髪のところ、領民たちの暴動を心になげながら、五千の兵を率いて出陣した。

これを大野治房側から眺めてゆくと、奈良方面はとにかく、この紀州口では、見事に長晟が、畏にかかって呉れた……と見えたに違いない。

こうして浅野勢を誘き出しておいて、その間隙を狙って領民の暴徒に、和歌山城を襲わせて挟撃するのが、彼等の作戦だったのだ……

浅野勢の先頭が、佐野に着いたのは九ツ半（午後一時）で、この時長晟の本隊はそれより後方、樫井川を距てた信達に達していた。

この信達は、大野修理の旧領だったので、治長の老臣北村喜太夫と大野弥五右衛門が大坂勢の到着を待って蜂起しようとし、まさに、行動を起こそうとしている時で、それを探知した浅野勢は直ちに喜太夫を引っ捕え、弥五右衛門は抵抗したので斬り捨て、ここに両軍の火蓋は切られた。

三

この時の大坂方の人数は一説によれば四万ともいわれ、又二万とも記されている。

四万は少し過大であるとしても、五千の浅野勢にとつては、とにかく四、五倍以上の人数であったことは推察出来る。

大坂方の総大将はいうまでもなく大野治房で、その下に道大治胤、郡主馬、岡部大学、塙団右衛門、淡輪六郎兵衛、御宿勘兵衛、米田監物など、ひとかどの侍大将がそろつていた。

塙団右衛門直之は、大坂に集まつた浪人の中でも後藤又兵衛基次と共に勇名の轟いた豪傑で、以前は加藤嘉明に仕えていた。

それが関ヶ原のおりに抜け駆けして叱られたのに憤慨し、さっさと立ち去つた人物であり、御宿勘兵衛正友は、越前の忠直に仕えていて、これも主君と衝突して退去した人物だった。今でも彼は戦に勝つたら越前一国は自分が貰おうと放言している。

大野道犬や郡主馬はもともと豊家の家臣であったが、岡部大学則綱にせよ、米田監物にせよみな一癖も二癖もある大将分で、二万の大軍のうち、その殆んどが、合戦と聞い

て馳せ集まつた牢人たちだった。

それだけに、彼等の放火と放火のあとの奪略狼藉は徹底したもので、堺の町民は憎悪をこめて震えあがつた。

堺の焼き討ちを指揮したのは治房の弟の道犬であったが、そのため道犬は後に至つて町民たちに惨殺されてゐる。

そうした乱暴きわまる部隊が、二十八日には堺から岸和田、貝塚近くまで押し出して来ていたのだから、正面からぶつかつては浅野勢に勝味はなかった。

総大将の大野治房は、塙団右衛門と岡部大学を先鋒にして、一挙に岸和田の小出吉英を打ち破り、紀州路へ押し出すつもりであつたが、小出吉英は援将の金森可重とともに、東軍の命を守り、城に籠つて撃つては出ない。

そこで治房は、弟の道犬を、岸和田城の押えに残して、そのまま貝塚から佐野をめざしておし進んだ。

一方浅野勢の先鋒は佐野に着くと、二陣、三陣が、樫井、信達に達したのを確かめて、ここで後陣との連絡をとることにした。

先陣の大将は、浅野左衛門佐、浅野右近、それに亀田大隅の三人だったが、三人が一緒になつて、遅い昼食を開いているところへ、尾崎村の九右衛門という百姓が、駈けこんで来て、大野治房勢の接近を知らせてくれた。

「申し上げます！ 大野主馬亮治房さまが二万以上の大軍を率いてこれへ進んで参ります。もう先頭は貝塚へ着いているかも知れません」

それまでまだ浅野勢は、敵の動きを掴んでいなかったのだ。

「それは一大事だ。すぐに斥候ちかひを出して見よう」

出された斥候は間もなく戻って、

「如何にも敵は貝塚まで来ています」

「して人数は、何程じゃ」

「はい。大野治房、塙直之、岡部則綱、御宿正友、米田監物などの軍勢で、二万と号していますが」

「なに二万……」

浅野左衛門佐は即座に答えた。

「仮りに二万あろうと三万あろうと烏合の衆じゃ。すぐに蹴散らして通るとしよう」

すると、亀田大隅がきびしくこれに反対した。

四

戦争に勢いは付きものだ。味方の先鋒は二千に足りなかったが、ここまでやって来て、引っ返したのでは士気にかかわる。

そう思って浅野左衛門佐は、一挙に蹴散らそうと言った

のだが、亀田大隅の考えは逆であった。

「烏合の衆にも押うべからざる勢いの付くことがござる。

それは、味方の人数が敵を圧倒して優勢の場合と、勝ちに乘じた時でござる。聞けば人数は二万に近く、しかも堺から岸和田まで焼き払って進んで来ている。そうした勢いのついている時には輕はずみは禁物でござる」

「では、折角士気の揚っている味方に、退却を命ずるのでござるか」

「退却ではござらぬ。大軍と遭遇したゆえ、これを蹴散らすに都合のよい地点まで引っ返して、そこへ敵を誘い込むのでござる」

「わしはそうは思わぬ。それではやはり敵を怖れたことになる」

「いや、そうではござらぬ。ここに止って守ればよい……という戦ならば、このまま頑張るのもよからう。この佐野はそのような足場のよいところではない。それゆえ、さつさと安松、長滝のあたりまで引き揚げて敵の勢いの衰えろたとところで、これを突破して大坂へ近づく……その方が戦の駆け引きに叶うものでござる」

どちらも気が立っているのに、なかなか意見はまとまらなかった。

そこで浅野右近が仲裁に入って、両人の意見をそのまま

本陣にある浅野長晟に告げて決裁を仰ぐことになった。

長晟は、領内に蜂起している暴徒の動きを案じている時だけに慎重だった。

「——なるほど、佐野で敵を迎えるのは地の利からして宜しくない。右近と大隅とは、安松、長滝のあたりまで退き、左衛門佐は榎井川の手前までさがって、川を前にし、切岸の上に陣を張って敵を待つように」

長晟にそう決裁されてはこれに従うより他にない。

浅野勢は、いったん手に納めた佐野を捨てて、その日の昏方から兵を退きだした。

進んで来る時にはまっ蒼に晴れていた夏空が次第に雲量を増して来て、夜半すぎからシトシト雨が降りだした。

「何のことじゃ。このようなことなら、汗を流して急ぐのではなかった」

「その事よ。雨の中を、夜中にわざわざ退いてゆく……これでは始めから負け戦の練習をしているようなものだぞ」

「しかし、大御所のお気には叶うかも知れないなあ。進むことを知って、退くことを知らざれば禍いその身に至る……と、仰せられているそうな」

「おくがよい。それは勝つことを知って、負けることを知らざればじゃ！　しかし、戦に負けることなど知ったら一大事じゃわい」

ついに、こうして雨夜の陣替えに朝までかかった。幸い

曉方に雨は止み、その代りに霧が深く立ちこめて、長滝には浅野右近、安松には亀田大隅、いちばん退くことの不平だった浅野左衛門佐は、更にその後方の榎井川の手前まで退いて、誰にも発見されずに陣をしき直した。

ところが一方大坂勢は、勢いこんで貝塚までやって来ると、

「腹が減っては戦が出来ぬぞ。さあ徴発じゃ徴発じゃ」

寄せ集め軍の本性をあらわして、暮れ方からいっせいに腹ごしらえにかかって行った。

五

住民のいちばん怖れているのは、この大坂勢の「徴発」であつた。

彼等はすでに世に容れられず、不平満々の人生の生き場を、合戦に求めて集まった戦国人なのだ。

それだけに戦場ではこの「徴発——」が唯一の楽しみになっている。家康は必要ギリギリのものを徴発した場合には、必ず代金を支払うように厳命している。大坂方でもむろんそうした命令は出ているのだろうが、実行はされていなかった。

「それ、押し出していって食物を集めて来い」

そうなる、これに便乗して騒ぎまわる無頼の徒もまた必ずといってよいほど出て来るものだ。

「食糧ならば、わしが集めて進ぜましょう」

この時も貝塚の願泉寺にト半斎という俄坊主がいて、これがまっ先に立って兵糧集めを手伝った。

とにかく、大坂城を前夜のうちに、そのまま、まる一日強行軍を続けて来ているのだ。人馬ともに、空腹も疲れも並々ならぬものがあつた。

「米だけではとても足りぬ。麦を混ぜた握飯を分けるように」

ト半斎は、気負い立って百姓や町人から有無をいわさず米、麦を取りあげて廻っていたが、やがてどこで手に入れたのか、おびたらしい酒を陣中に運びこんだ。

「こりゃ気の利く坊主だぞ。酒まで見つけてくれるとは」「話せる奴だ。もっとあるだろう、みな持って来い」

こうした場合の酒がどのような働きをするものかは改めて書くまでもあるまい。

そうでなくともあぶれ者の多い烏合の衆なのだ。彼等は先を争って酒をとりあい、中には足腰が立たなくなつても、夜が明けかけても、まだ盃を手から離さない者がたくさんあつた。

「呆れた奴等だ。夜が明けたというのに」

今日の先鋒は塙団右衛門、続いて岡部大学という順であつたが、岡部大学が起出してみると、殆んどがまだ住民を追ひ出した空屋のそこそこで寝こけている。

そこで大学は、起きている自分の手勢を引きつれて、きつと先に出発してしまつた。

この岡部大学と塙団右衛門はひどく仲がわるかつた。それも大した深い原因があるのではない。冬の陣のうちに先陣争いをしたという、如何にも戦国人らしい意地からだつた。

塙団右衛門は、雨のあとの朝霧の中で眼を覚してみると、もはや岡部大学の一隊が先発してしまつてゐる。

彼は鞍壺を叩いて憤慨した。

「おのれ、又しても先手に断わりもなく勝手に出て失せおつた。すぐに追いかけよ」

紀州路の案内役として連行してゐる淡輪六郎兵衛重政を先に立てて岡部勢のあとを追つた。

そして岡部勢に追いついたのは、前夜、浅野勢の退いた佐野から更に先の、蟻通しの北であつた。ここまで来て岡部勢はひと息いれていたのだ。

「こりゃ岡部、功名争いも時によるぞ。今日の戦の先手の大将を承るはこの塙右衛門だ。それを出し抜いて勝手に進むという軍法をうぬはどこで習つたのだ。これが原因で味

方の不利を招いたら、おのれ等のゴミ溜腹の一つ二つ切ったとて申し訳が立つものではないぞ。この宿無し犬め」

团右衛門は火のようになって大学を罵った。

六

戦国人の悪口雑言は愛嬌の一つだ。いや、時にはそれが勇名をかざる名物にもなっている。

墙团右衛門の口汚い悪罵にあつて、岡部大学も負けてはいなかった。

「フン、ゴミ溜腹はそっちのことじゃ。飲みつけぬ振舞い酒に喰い酔つて、出立の時刻を忘れるのが先手の大将の心得か。詰らぬ戦をして腹を切ると、出て来るのはどぶろくばかりだろう」

「うぬッ、言わせておけば口の減らぬ。見事その鼻あかしてくりようぞ」

「おう、望むところだ。どっちが強いかやって見よ」

「よくぞ申した。その高言を忘れるなッ」

团右衛門は、吐くだけ毒気を吐くと、すぐさま紀州路の道案内を声高に呼び立てた。

「やあやあ、山口兵内、兵吉兄弟出て参れ」

「はッ。山口兄弟、これにござりまする」

「おう、今日のうちに、われ等は和歌山まで押し寄せる。

敵もそろそろ出て来ている筈じゃ。すぐさま斥候を仕れ」
「心得ました」

こうして二人を先に出発させて、团右衛門は先頭に立った。むろん岡部大学もびたりとその後について進んで来る。と、いよいよ蟻通しにかかろうとするところで、斥候の兵内兵吉兄弟が引り返して来るのが見えた。

「いよいよ出て来たか」

墙团右衛門はあぶみの上に突立って大声で問いかけた。
「はいッ、人数はまだ見えませんが、前方で銃声が致しました」

「たわけめ、それが敵じゃ。よしッ。一揉みに揉みつぶしてしまえ！」

そのまま駆け続けようとするので、淡輪六郎兵衛があわてて馬を廻して来た。

「このあたりは、まだそれがしの案内区域、猪突は危のうござりまする」

「な、なんだと。おぬしここで停止せよとか」

「如何にも。ここから樫井までのおよそ半里がほどは、ところどころに坂があり、土手があつて伏勢をおくに最も都合のよい地勢にござりまする。それゆえ、百騎ばかりのこの小勢で進むは危険千万。貝塚より後陣の到着を待つがよろしかろうと存じます」